

講演一 大宰府防衛体制と鞠智城

講演者紹介

小田 和利（おだ かずとし）

奈良大学文学部史学科を卒業後、福岡県教育委員会文化課勤務を経て、現在は九州歴史資料館学芸調査室長。

講演一 「大宰府防衛体制と鞠智城」

小田 和利（九州歴史資料館学芸調査室長）

はじめに

皆さん、こんにちは。九州歴史資料館学芸調査室長 小田と申します。私は、「大宰府防衛体制と鞠智城」ということで、お話しします。

一、I期大宰府の成立

（一）齊明天皇の征西と朝倉宮

大宰府の成立に関しては、私は齊明天皇の征西が深く関わっていると考えております。そこで、先ず齊明天皇・朝倉宮について、ご紹介したいと思います。

百済が新羅により滅ぼされ、齊明天皇は百済復興のために征西し、朝倉橋広庭宮を築造しますが、朝倉宮について、五カ所ほど推定地があります。①旧朝倉町（現朝倉市）の須川、②同山田、③旧杷木町（現朝倉市）

の志波地区、④小郡市上岩田遺跡、それと大宰府政序跡を朝倉宮とする新説が出てきました。

私としましては、③の志波地区が最有力と考えております。齊明天皇は、齊明七年（六六一）、難波宮から瀬戸内海を航行しまして、途中、石湯行宮、現在の道後温泉の場所ですが、そこに一旦寄りまして、それから娜大津、現在の博多湾ですが、そちらに入港します。そして磐瀬行宮、娜大津の近くに存在したと考えられている行宮で、その磐瀬宮（長津宮に改称）に入りまして、それから朝倉宮に移ります。

齊明天皇は、七月二十四日に朝倉宮で亡くなります。中大兄皇子は、齊明天皇の遺骸を伴つて、朝倉宮から

長津宮に移ります。一〇月になつて娜大津から飛鳥へ帰つていくというルートを取ります。これについては、レジュメの一三頁（資料編一四頁）に図面を入れておりますが、征西ルートは古代山城が築造されている場所とほぼ重なります。

この写真は、朝倉宮の推定地と考えている、旧杷木町の志波地区になります。台地の西側に筑後川が流れています、三方を山で囲まれた一キロメートル四方の範囲、この場所が朝倉宮の推定地であります。この場所から五キロメートルほど東には、杷木神籠石という古代の山城が築造されています。また、広大な筑後平野があつて、兵站基地になり得る場所、このような所に朝倉宮が存在すると考えております。

朝倉宮に関連する遺跡の一つとして、大迫遺跡があります。ここは、標高六〇メートルほどの丘陵を三段に造成しまして、その中にこのような建物群、これは二間×二間の倉庫ですが、こういった建物を造っています。朝倉宮は、一期大宰府、七世紀後半ですが、その成立に深く関わっていると考えております。

(1) 一期大宰府の成立

宰さぶら、大宰おおさぶら、総領そうりょうといった文字が『日本書紀』に出てきます。大宰の初見は、推古一七年（六〇九）ですが、それから大宰帥、大宰府の文字が出てきます。その中で一番注目されるのが、筑紫大宰府典の記事です。これは、持統五年（六九一）に筑紫史つくしへ益ますが、二九年間の永続勤務を表彰されるという内容です。六九年から二九年を逆算しますと六六二年ですが、そのころの大宰府、実態は分かっていませんが、ただ役所的な施設は既に存在していたということになります。

その大宰府政序跡は、太宰府市觀世音寺、通称都府樓跡と呼んでいる場所に所在します。政序跡の背面には四王寺山があり、大野城が造られた山ですが、そこから月山という丘陵、その西側には藏司という丘陵が延びています。その二つの丘陵に挟まれた中に政序跡があります。その大きさは、東西約一一〇メートル、南北約二二メートルになります。それと現在、政序跡の南側は住宅街になっていますが、大宰府に関連する役所、官衙群が広がっています。

大宰府政序跡は三時期に分かれています。一期が七世紀後半から八世紀初頭と考えております。建物は掘立

柱といいまして、素掘りの穴を掘つて柱を建てる型式のものです。このⅠ期の建物については、軍事的な施設ではないかといわれております。

Ⅱ期が八世紀前半から一〇世紀半ばですが、Ⅱ期になると礎石建ちの建物に替わります。大宰府として西海道を総監する役所に変貌するわけです。正殿・後殿・脇殿・南門・中門・回廊・築地を備え、都宮のいわゆる朝堂院型式を真似た建物配置になります。それが天慶四年（九四二）、藤原純友の反乱で焼失します。その後に再建された建物がⅢ期になります。Ⅲ期の建物は、基本的にⅡ期の建物を踏襲しています。

大宰府の機能には、大きく三つあります。一つ目が対外交渉として、蕃客、外国使節に関すること。帰化人の措置に関すること。饗識、きょうしき、外国使節及び渡来者の接待に関すること。これについては、福岡市にある鴻臚館跡がいわゆる迎賓館となります。二つ目が、西辺防備です。防人、烽、軍団及び水城、大野城、基肄城、鞠智城、こうした古代の山城は西辺防備に関連します。三つ目が、西海道を統括する役所であるということです。

この写真は、先ほどご覧いただきましたが、これが大宰府政厅跡です。現在、Ⅲ期の建物を整備しております。この下にⅡ期の建物、そしてⅠ期の建物が重複しております。レジュメ（資料編一六頁）には、政厅跡Ⅰ期の掘立柱建物の変遷図を入れておりますが、場所的には政厅正殿跡、メインの建物の直下になります。また、南側には南門・中門跡とありますが、その付近でしか確認されていません。と言いますのも、三時期の遺構が上下に重複しており、Ⅰ期の建物は一番下になりますので、Ⅰ期の遺構については実態がよく分かつ

ていなしという側面があります。

このⅠ期の建物については、軍事的な施設ではないかとする意見もありますが、それがⅡ期直前になつて整備され、Ⅱ期になると掘立柱建物から礎石建ちの立派な建物に替わつていきます。

二、大宰府防衛体制の構築

(一) 水城・大野城・基肄城・鞠智城の登場

次に、その大宰府をどのように守つたかになりますが、先ず水城ですが、『日本書紀』天智天皇三年(六六四)、是歲條に、「対馬嶋・壱岐嶋・筑紫國等に防と烽を置く。又、筑紫に大堤を築きて水を貯えしむ。名けて水城と曰ふ」と登場します。

ここで、「城」を「き」と発音しています。水城の場合は外濠に水を溜めていて、水を貯えた城であるから水の城、「みずき」と呼ばれました。大野城・基肄城に関しては、『日本書紀』天智天皇四年(六六五)、秋八月條に、「達率答体春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率憶禮福留・達率四比福夫を筑紫國に遣して、大野及び櫟二城を築かしむ」とあります。現在は、「おおのじょう」と発音していますが、古代では「おおさ」と発音していたと考えられます。『日本書紀』には、「大野」と記されており、規模が大きい山城であることから付けられた名称とみられます。「櫟」は、基肄城のことですが、この「櫟」という言葉の意味は垂木で、「肄」には、若い枝とか、ひこばえの意味があります。要するに、樹木がたくさん繁茂している状態から付けられ

た名称と思われます。

先ほどの、憶禮福留ですが、憶禮福留、余自信、木素貴子、谷那晉首等の百濟高官は、白村江敗戦後に日本軍とともに渡ってきています。白村江で敗れたのが六六三年の八月で、翌九月には来日しています。大野城が造られたのが六六五年八月なので、これを逆算しますと太体二年になります。大野城・基肄城の築城に関しては、百濟の高官が関与しております。二年をかけて大野城・基肄城は完成したと考えています。

それと先ほどから話が出ております鞠智城ですが、『続日本紀』文武天皇二年（六九八）五月条に「大宰府をして大野、基肄、鞠智の三城を繕治つくらはしむ」と登場します。鞠智城に関しては、何年に造られたというはつきりとした年代は出ません。この修理記事が初見記事となります。先ほど、鞠智城の調査で、矢野さんから報告がありました、百濟系の軒丸瓦、銅像菩薩立像の年代観から大野城とほぼ同時期に造られたと考えられます。

(二) 大宰府防衛施設

① 水城跡

水城跡の具体的な構造ですが、水城跡は福岡平野が一番狭くなつた場所に造られていて、長さが一・二キロメートルあります。この基底部といつてはいる、土壘の基部になる幅が八〇メートルで、博多湾側に幅六〇メートルの外濠が存在します。この外濠が、「水を貯えしむ」として、水城の名称の由来になつたと考えら

れます。

以前は、水城ダム説というのがありまして、大宰府側に水を溜めて、外敵が攻めて来たときは水門を開いて、その水流でもつて外敵を押し流す。そのような考え方もありました。ところが、昭和五〇年、九州歴史資料館の調査によつて外濠の存在が確認されました。それ以降、外濠は博多湾側に存在すると認識されるようになります。

ただ、最近の調査では、この外濠は一定の幅で一二・二キロメートルに渡つてつながつていたのではなく、かなり出入りがあるということが判つています。また、水城には東西二つの門がありますが、西門跡の調査所見では、門の前には外濠を渡るための橋は架かつておらず、道路が門につながつているということを確認しています。

それに、この基底部といつてゐる土壘のベースとなる部分、それと土壘本体の上成土壘といつてゐる部分ですが、この両者は土質の状況が異なります。基底部は、割と粗い単位で土を盛つてゐるのに対し、上の本体部分は版築工法により緻密に土を積んでいます。このことから、私は水城の二段階築造説を出しております。

水城跡の門建物は、西門跡で確認されています。I期からIII期の変遷がありまして、I期は、掘立柱式の門になります。冠木門かぶきもんといいまして、神社の鳥居を想像して頂いたら分かるかと思います。柱が二本立つて、その真ん中に扉が取り付く簡単な構造の門です。しかも、間口が四・二メートルと狭く、まさに防御を重視

した門です。

それが、八世紀の前半になりますと、瓦葺の立派な礎石建物に変わります。間口も一〇メートルと二倍以上に広がります。門の型式でいうと「はつきやくもん」（八脚門）、別名「やつあしもん」ともいいます。その後、また新羅との関係が悪化してくると、今度は楼門といつて二階建ての門で、中ほどに回縁があり、そこから弓矢とか弩を射ることができる戦闘的な門に変わります。この様に、水城の門は、東アジアの情勢と深く関わる門になります。また、八世紀のⅡ期の段階になると、大宰府政府は瓦葺の礎石建物に変わりますが、それと連動しまして水城の門、それから大野城の城門も瓦葺の建物に変わっていきます。

これは、水城のJR欠堤部の写真ですが、つい最近調査を行いました。JR欠堤部というのは、JRの線路によつて土壘が壊され無くなつてゐる部分です。この場所は、今からちょうど一〇〇年前に調査がなされました。今年は、水城・大野城・基肄城築造一三五〇年ということもありまして、この場所を再調査しました。水城跡の土層断面公開を六月一日に行いましたが、もう一回八月三〇日に、土層断面の公開をいたします。興味があられる方は、福岡と遠いですけど、おいでいただきたいと思います。

水城土壘の一番下には、黒色土と書いている黒い土の層があつて、その上に黄色の粘土があり、さらに灰色の砂があり、大きく分けると約五〇センチメートルの単位で積まれています。この部分までは、いわゆる基底部といつてあるベース部分になります。そして上層が、黄色粘質土と灰色砂の互層で、交互に積んでいます。このように、基底部と上成土壘とでは、積み方が異なることがあります。

下の写真は、西門跡の調査状況になります。この壁面に見えている石垣ですが、Ⅰ期から石垣を積んでいて、ここに壅みが見えているかと思いますが、この場所に柱が立ちます。もう一つ反対側にも柱が立つて、いわゆる冠木門という門型式になります。その上に見えている白っぽい砂の層と赤っぽい粘土の層、これはⅢ期に城門を改築して楼門に替わりますが、その時の修築の痕跡です。それと手前に大きな石が落ち込んでいる溝がありますが、この溝は鴻臚館へ向かう官道の側溝になります。

また、水城土壘の直下には、木樋という導水管が埋設されています。底板は二枚で、一边が二五センチメートルもある鉄製の錨^(なみ)で二ヵ所留めています。内法は一メートルほどですが、底板の断面を見ますと、年輪から直径が一・四メートルもある大木を切り倒して、木樋を造っていることが分かります。大勢の人とか、期間とかをかけて造られたのが水城です。実際に水城と呼ばれていた証拠が、この墨書土器です（資料編一七頁）。「水城」と書かれた土器が発見されています。年代的には八世紀後半になりますが、修理水城専知官というのが置かれまして、恐らく水城の修理を行つたものと考えられます。

②大野城跡

続きまして大野城跡ですが、大野城は四王寺山に築かれた山城で、この稜線に土塁が巡っています（資料編一九頁）。谷部においては、土石流が発生すると土塁だと決壊しますので、石塁を設けています。それと、城の内部では七〇棟ほどの倉庫跡が見つかっています。倉庫跡からは炭化米なども出ていまして、籠城して

戦う性格を持つた山城であるということが分かっています。

レジユメの構造のところ（資料編一〇頁）には、外郭線六・二キロメートルと書いていますが、南北は二重に土塁が巡らされており、両方合わせると八キロメートルほどの外郭線を持っています。しかし、北側については、土塁線がはつきり分かれていません。レジユメには、一応、二重と書いていますが、確かにではなないので六・二キロメートルという数字を出しています。

この土塁ですが、基部幅が一一・四メートル、高さが六・四メートル、傾斜角度が七〇度ほどあります。また、土塁の頂部には柵が設けられています。土塁の角度が七〇度もありますので、とても人が登れるようなものではありません。それと、先ほど申しました谷部には、石を積み上げた石塁が六カ所確認されています。大野城跡にも城門が存在します。以前は四カ所しか確認されていませんでしたが、平成一五年に豪雨がありまして、大野城跡も大きな被害を受けました。その復旧に係る調査を行いましたところ、新たに四カ所増えて、八カ所になりました。さらに、去年、クロガネ岩城門が見つかり、現在は九カ所となっています。

それと建物ですが、大野城跡の場合は、八カ所に分散しています。三間×五間の総柱倉庫が主体で、七〇棟ほどが城内で確認されています。ただ、七〇棟という数字は、建物の数の全てではなく、もつと増える可能性があります。

この写真は、太宰府口城門の一期、当初に築かれた城門の門柱になります。直径が五〇センチメートル位で、材質がコウヤマキになります。柱の下の方に「孚石部（郡・都？）」『うきいしへ』と針のようなもので

書いた細い文字があります。実は、これも最近分かつたことです。

これは、鬼瓦の写真ですが、Ⅱ期の瓦葺の礎石建物に替わった時に葺かれた鬼瓦になります。この鬼瓦の型式は、いわゆる大宰府式鬼瓦といいまして、重要文化財に指定されている大宰府跡の鬼瓦と同じ型式です。奈良時代の瓦になります。

この、一番右端の棒状のものですが、長さが二六センチメートル、重さが一三キログラム弱あります。扉の軸を受ける軸受け金具になりますが、日本では大野城跡で初めて見つかりました。

この写真は、百間石垣と呼ばれる石壘になります。長さが一八〇メートルほどあることから百間石垣という名前が付いています。土石流が発生した際は、土壘だと決壊しますので、こうした谷部には石壘を設けています。

この写真は、主城原地区の礎石建物になります。大野城跡の場合、三間×五間の総柱倉庫が八地区に分散して存在します。

③基肄城跡

この写真は、基肄城跡になります。大宰府政厅跡の南約一〇キロメートルに位置します。基山という山一帯に築かれた古代の山城です。尾根線を土壘でつなぎ、谷部には石壘を設けており、外周は約四・四キロメートルになります。基肄城跡の場合も、四〇棟ほどの礎石建物が見つかっています。大野城跡と同じく籠城

としての性格を有することが分かつています。

この写真は、南門石壘と呼んでいるものです。南門そのものは、よく分かつていませんが、この切れている場所に城門が想定されています。石壘の一番下部に石組みの溝があり、水門になります。背をかがめたら通れるような大きさの通水口が開いています。

規模的には、外郭線全長約四・四キロメートル、土壘の高さ約二メートルで、その基部幅は約一一・五メートルあります。大野城跡より若干規模が小さいですが、基本的に土壘で外郭を構成しています。谷部には三カ所ありますが、石墨を設けています。城門については、四カ所確認されています。北帝門・東北門・仏谷門・南門です。南門跡がこの場所になりますが、門の構造につきましては分かつていません。

基肄城跡も城内に三間×五間の礎石倉庫が四〇棟ほど存在します。ただ、基肄城跡の場合は大野城跡と異なりまして、尾根線が東側に向かつて数本延びる恰好となります。その尾根線上に七カ所くらいに分散して建物が存在するということになります。

それと、基肄城跡の中には、大礎石群という名称の礎石建物がありまして、梁行、建物の妻側ですが三間、長さにして九メートル、長い方の桁行は一〇間、二八・四メートルの長大な建物になります。この建物は長倉型式とされています。具体的には、東大寺の正倉院を想像していただければよいかと思います。このような大規模な礎石建物が基肄城には存在します。この写真が基肄城跡の大礎石群です。建物の一部ですが、柱を支えた礎石が並んでいます。

また、基肄城跡のすぐ東側には、とうれぎ土壘と関屋土壘という二つの土壘があります。この写真の背後に見える山、これが基肄城跡になります。後ほどお話しします、大宰府羅城に関連してきますが、山城がありますぐ南に土壘が存在する、そういう位置関係になります。

④阿志岐城跡

次に、近年、新たに見つかった阿志岐城跡について紹介します。阿志岐城跡は、平成二一年に発見された山城です。大宰府政府跡の南東約五キロメートルの宮地岳という山にあり、土壘・石壘が確認されています。その土壘ですが、山の高い方の北西部では土壘は確認されません。ただ、尾根線を自然の城壁と見立てますと、総延長は三・七キロメートルほどになります。

土壘の基部には、一段から二段の石列を据えています。この構造は、神籠石に類似する構造です。この写真は第三水門と呼んでいる場所になります。石壘の下部を調査しておりますが、水が流れる水門自体は確認されていない状況です。城門についても調査がされておらず、まだ未確認です。

阿志岐城跡の築造時期と目的ですが、レジュメには「^{アシキ}蘆城駅家」と書いています。『万葉集』の巻八の中には、「蘆城駅家」と出でています。蘆は植物のアシになります。元々、山城の付近にたくさんアシが生えていて、アシがある城だからアシキ（蘆城）と呼ばれていたとみられます。

その築造時期ですが、第三水門の前面で、八世紀半ばころの須恵器が発見されています。それと『万葉集』

に登場する「蘆城駅家」との関連性が考えられます。このことから、奈良時代に造られた山城ではないかと私は考へております。次に、造られた目的ですが、先ほどの蘆城駅家の前面には、田川道という大宰府から豊前に向かう道路が存在したと考えられています。その道路を往来する人・物を監視するために、この阿志岐山城が存在すると思われます。

(三) 大宰府羅城

レジユメ（資料編）三頁）には、大宰府羅城と出していますが、いわゆる大宰府防衛プランのことになります。『日本書紀』天智六年（六六七）一一月条には、「筑紫都督府」という役所名が出てくることから、都府楼跡には軍事的な施設が存在していたとされています。その軍事的な施設を大宰府政厅跡Ⅰ期の建物群にあてる意見があります。なお、大宰府の起源については、那津宮家という娜大津（博多湾）の近くに置かれた宮家が、白村江の敗戦後に都府楼跡の地に移る際に軍事的機能が強化されたとみられています。

しかし、私は磐瀬宮という冒頭に紹介しました、別名長津宮の機能が移転したのではないかと考えています。齊明天皇が亡くなつた後、中大兄皇子は朝倉宮から長津宮に移り、二カ月余り滞在します。その間、百濟王子豊璋に職冠という織物の冠を受けたり、嫁を娶らせたり、そうした儀礼的なことを長津宮で行つています。それと、齊明天皇の征西には、天皇の一族郎党が九州まで来ているわけですが、天皇の一族を収容可能な規模を持ち、政務と儀式が執り行える施設・機能を備えていたのが長津宮とみています。その長津宮が

持つていた機能が都府楼跡の地に移ったのではないかと考えております。

その大宰府の守りとして、北側に大野城があり、大野城と南側の基肄城をつなぐ形で水城が存在します。博多湾側からの敵の侵入を想定して、大宰府の守りを固めているわけです。この土壘線がない場所、ここは自然の山並みになりますが、自然地形を巧みに生かし、山城・土壘・山並みでもって大宰府を護る防衛ラインが大宰府羅城になります。この大宰府羅城の防衛構想は、百濟の王都扶余の防衛体制が反映されているといわれています。

この図（資料編一四頁）が阿部義平さんが提唱された大宰府羅城の図面になります。ここに大野城がありますて、これが水城で、この福岡平野が一番狭くなつた場所を水城大堤が塞いであります。そこから少し自然の丘陵が入りますが、上大利の小水城、春日土壘、小倉土壘、大土居土壘、天神山土壘などの小水城と呼ばれる土壘が続きます。その土壘から基肄城までは、また自然の山並みを介すわけですが、基肄城からとうれぎ土壘、関屋土壘さらに宝満山を経て、大野城に戻つてくる防衛線、これが大宰府羅城の防衛ラインになります。

しかし、阿部さんが大宰府羅城説を出された時は、羅城の推定ラインはこちら側になつていて、後に阿志岐城跡が新たに発見されました。ですから、最初に阿部さんが想定された防衛ラインの外側に阿志岐城が位置することになります。また、大宰府政序跡の南東側の平野部では、土壘は確認されておりません。羅城という言葉は、城の外郭で、城壁を巡らすということになりますので、阿部さんが想定された大宰府防衛ライ

ンは、厳密には羅城ではないとする意見もあります。

私は、大宰府を囲む、阿志岐城（→大野城）→水城（→小水城、それから基肄城（とうれぎ土壘）→閑屋土壘）の防衛施設をつなげたライン、このラインが羅城という言葉が適切かどうかは別として、これを大宰府防衛ラインと考えております。

三、大宰府と鞠智城

最後になりましたが、大宰府と鞠智城、大宰府の関与ということで入れています。先ほどから話が出でております文武天皇二年（六九八）五月条ですが、この中で、「大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を縦治（くわうじ）はしむ」と冒頭に大宰府が出てきます。また、『日本文德天皇実録』天安二年（八五八）六月条の記事の中でも冒頭に、「大宰府言す。：中略、肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴り、同城の不動倉十一宇を火く」と出てきます。距離的に鞠智城は、大宰府から約六五キロメートル離れていますが、大宰府が西辺防備と西海道、いわゆる九州を統括しているので、大宰府が鞠智城の繕治にも関与していた、ということが言えると思います。

その鞠智城の性格ですが、矢野さんのほうで詳しく紹介がありましたので、簡単に話しますけれど、一つが大宰府の後方支援施設といわれております。城内には礎石立ちの倉庫があり、兵站基地として大宰府のバッカアップを行つたとする考え方です。それと九州南部統治の拠点施設であつたともいわれております。あと、古代官衙です。城内からは、荷札木簡が出ており、官衙的な建物も存在することから、官衙的性格を持つて

いたと考えられています。また、百濟との深い関係もいわれています。百濟仏、八角形の建物、百濟系の瓦などです。このような性格を鞠智城は持っていたとされておりますが、その性格は時代とともに変化したことが指摘されています。

（資料編二五頁）に、兵站基地と書いておりますが、最初の朝倉宮の話に戻しますと、私は旧杷木町の志波地区を朝倉宮の推定地と考えています。志波地区は一キロメートル四方の面積があり、その南には筑後川が流れています。さらに肥沃な穀倉地帯である筑後平野が広がっています。このように、朝倉宮は三方を山で囲まれ、南には筑後川という水運を兼ねた天然の要害に守られた中にあり、筑後平野という食料生産地を擁しているわけです。いわば、兵站基地としても機能するわけです。朝倉宮の例を挙げましたが、兵站基地であるということは、重要な意味を持ちます。また、九州南部統治の拠点、官衙施設でもあつたということは、まさに大宰府の後方支援的施設とみられ、その分、大宰府の関与も大きかつたと考えられます。

文武二年の記事では、大野城と基肄城、鞠智城が同じ時期に繕治されたことになっています。大野城は先ほど紹介しましたとおり、八世紀になつてから礎石の建物に替わります。基肄城についてはよく分かっていませんが、水城の門建物も八世紀になつてから礎石の建物に替わります。しかし、七世紀の末に、具体的にはどのようなことがなされたかは、文献上は全く分かりません。ただ、大野城跡では新たに五カ所の城門が発見され、原口・北石垣・觀世音寺口・クロガネ岩城門の四カ所は、何れも懸門構造であることが確認されています。また、礎石立ちの倉庫も設けられます。この懸門構造の門建物と新設した礎石倉庫が繕治の実態

ではなかつたかと考へております。なお、繕治に至つた原因、例えば地震であるとか風水害などの自然灾害も一因として挙げられます。その原因解明についてもこれから課題といえます。

以上で私の話は終わりますが、最後に若干九州歴史資料館の展示紹介をさせていただきます。八月一六日（九月二八日の会期で「水城のすべて」という企画展を開催いたします。また、八月三〇日には水城土塁の断面公開をいたします。よろしかつたら、ご参加いただきたいと存じます。丁度時間となりましたので、これでお話終わります。どうもありがとうございました。